

# 幼児はお化けをどのように認識しているのか？

富田 昌平\*・小澤 瑞希\*\*

## How do preschoolers understand monsters and ghosts?

Shohei Tomita and Mizuki Ozawa

### 要 旨

本研究では、お化けに対する幼児の認識について検討した。幼稚園の年少児、年中児、年長児を対象に、お化けに対するイメージ、お化けとの出会い経験と可能性判断、他者のお化け経験談に対する本当／嘘判断などについて質問を行った。主な結果は以下の通りであった。第1に、お化けに対するイメージは、発達に従ってより具体的にになり、特にモンスター系のお化けに関する知識が豊富になることが示された。第2に、お化けとの出会い経験は、年少児ほど多く報告し、経験したことが現実であるかのような恐怖をより感じやすいことが示唆された。また、経験の可能性判断では、年中児や年長児になるとより多様な視点から説明が行えるようになることが示された。第3に、他者によるお化け経験談に対する本当／嘘判断では、本当判断は年少児ほど多く、年中児や年長児では嘘判断が多く見られた。発達に従って、不確かな情報を鵜呑みにするのではなく、懐疑的に捉えることができるようになることが示唆された。考察では、幼児期におけるお化けに対する認識の発達の変化と、お化けを取り入れた保育実践を今後行っていくにあたっての留意点や展開上の工夫について議論された。

キーワード：お化け、恐怖、本当／嘘判断、認識発達、幼児

### 問題と目的

子どもは発達初期から親との会話や絵本やテレビ番組など様々な社会・文化的文脈の中で「お化け」と出会い、それに対する認識を形成する。例えば、「お化けだぞー」と言って親が子どもを怖がらせたり、「いい子にしていないとお化けが来るよ」と言って親が子どもを諭したりする場面は、幼児期の子どもがいる家庭では日常よく見かける光景であろう。また、その際、『ねないこだれだ』（せなけいこ作・絵、福音館書店）、『おばけのパーバパパ』（アネット・チゾン&タラス・テイラー作・絵、やましたはるお訳）などの絵本や、『おばけのQ太郎』（藤子不二雄作・絵）、『ゲゲゲの鬼太郎』（水木しげる作・絵）などのテレビ番組は、子どものお化けに対する認識の形成に多大なる影響を及ぼしてきたものと思われる。このようにお化けは子どもの日常において極めて身近な存在であるにもかかわらず、それについて幼児期の子どもがどのような認識を持ち、その認識は発達とともにどのように変化するのかに関しては、これまで十分に明らかにされてこなかった。

お化けとはいったい何であろうか。お化けは、一般的には「①ばけもの。妖怪。変化（へんげ）。②死人が生前の姿になってこの世に現れるというもの。幽霊。③普通よりずぬけて大きいもの。また、異形のもの。」（小学館『大辞泉』より）と定義される。このうち③は、驚異的であることを形容する表現であることから、厳密には①と②がお化けそのものを言い表したものであると言える。①は妖怪や妖魔、怪物、怪獣、怪人など、英語で言うところの“Monster”（モンスター）を指す。②は幽霊や死人、霊魂、怨霊、心霊現象など、英語で言うところの“Ghost”（ゴースト）を指す。従って、本稿で「お化け」という言葉を使用する際には、以下、モンスター系とゴースト系の両者を含むものとする。

お化けが子どもの中で印象的な位置を占めるようになるのはいつ頃なのであろうか。お化けとは想像上の恐怖である。それは一般的には現実に存在しないものとされ、先に述べたように、本やテレビなどのメディアや他者からの口頭伝承を通して人々の中に形作られるものの、実際にその姿を見たりその声を聞いたりすることはほとんどない。子どもの恐怖に関する従来の

\* 三重大学教育学部

\*\* 津市立立誠保育園

研究では、子どもの恐怖対象は、最初、大きな音や騒がしい音、見知らぬもの・人・場所、高い所、急に動かされること、痛みなど、現実的なものが中心であったのが、3歳頃をピークに減少し、代わりに、お化けや幽霊、暗闇、1人であることなど想像的なものが恐怖の中心になることが明らかにされている（Hurlock, 1964/1971; Jersild, 1968/1972; 富田, 2017a）。このことから、お化けが子どもにおいて恐怖の対象として認識されるようになるのは、2, 3歳頃であることがうかがえる。

実際、佐々木（1989）や田代（2001）では、それまではお化けと聞いてもさほど怖がらなかった子どもが、急に怖がったり嫌がったりするようになった事例を報告し、それは2歳後半頃であることを示している。また、今井（1990）は、物置の中に恐ろしいお化けを想像しながらも、あえてそれに近づいて楽しんでいる2歳児の事例を報告している。その他にも、富田（2012, 2016）は、想像上の怖いものを怖がりながらもあえて見たり近づいたりして楽しむ姿は、2歳児クラスですでに確認されることを報告している。こうした姿は1歳児クラスではあまり確認されない（たとえ報告されても、2歳児ほどには怖がるそぶりは見られない）ことを考えると、想像上の恐怖であるお化けが子どもの中で確かに怖いものとして印象的な位置を占めるようになるのは、2歳後半から3歳頃であることが考えられる。

また、想像上の恐怖は、子どもの現実生活をしばしば制限する。例えば、DiLalla & Watson（1988）は、ある3歳児が怪物になったふりをして大人を怖がらせているうちに、次第に自分自身が怖くなって泣き出してしまった事例を報告しているし、Harris, Brown, Marriott, Whittall & Harmer（1991）は、ある4歳児が扉の向こうに怪物がいるふりをして楽しんでいるうちに、本当に怖くなって自分で扉を開けることができなくなり、他の人に開けてもらった事例を報告している。また、Newson & Newson（1968）は、ある4歳児が地下室に猿が住んでいると想像したところ、地下室に行くことができなくなった事例や、ある5歳児が夜寝る時間になると、ベッドの下に怪物がいるからと寝室に行くことを嫌がった事例を報告している。これらはいずれも3歳から5歳の子どもの事例であり、彼らは想像上の恐怖としてのお化けを自ら想像によって作り出し、意識することができるものの、それらをコントロールすることはまだ困難であるようである。

さらに、空想と現実とを区別する能力に関して言えば、5歳頃までに、子どもは現実には起こり得ないような空想上の出来事と現実の出来事とを適切に区別することができるようになる（Taylor & Howell, 1973; Sharon & Woolley, 2004; 富田・原, 2006）。にもかかわらず、彼らの中で恐怖感情が強く喚起された場合には、正常な判

断が困難になることが明らかにされている（Carrick & Quas, 2006; Carrick & Ramirez, 2012; Samuels & Taylor, 1994）。例えば、Samuels & Taylor（1994）は、感情的に中立な現実の場面（例；人間の女性が木からリンゴの実を採っている）と空想上の場面（例；シカが人間のように料理をしている）、そして恐怖感情を喚起させる現実の場面（例；強盗がナイフで人を脅かしている）と空想上の場面（例；巨人が子どもを追いかけ回している）とを3-4歳児と5-6歳児に提示し、空想か現実かの判断を求めた。その結果、感情的に中立な前者2場面に関しては、空想と現実とを適切に区別することができたものの、恐怖感情を喚起させる後2場面に関しては、適切に区別することができず、いずれも「現実には起こり得ない」として避けようとしたことを報告している。Samuels & Taylorは、提示された場面が空想か現実かに関係なく、たとえ想像上だとしても恐怖感情を喚起することによって彼らの中で安全を求める防衛機制が働き、正常な存在論的判断が困難になったのではないかと考察している。このことは、想像上の恐怖としてのお化けは、幼児期の子どもにとって、たとえ5歳頃までに空想と現実とを区別する能力を発達させたとしても、存在論的判断の困難な存在であることを示唆していると言えよう。

幼児期の子どもにとって、お化けは強い恐怖感情を喚起させる存在であり、たとえ空想と現実とを区別し、想像上の恐怖に過ぎないと認識できるようになったとしても、コントロールすることが困難な存在である。ゆえに、それらは子どもからできるだけ遠ざけるべき存在と言えるかもしれない。しかし実際には、保育の現場ではこれまで、お化けのような怖いものを取り入れた遊びや活動が数多く行われてきた。なぜなのであるか。そこでは次のようなポジティブな側面が指摘されている（富田, 2016, 2017b）。

第1に、お化けは子どもの知的好奇心を刺激し、主体的な探索・探究を促す存在である。お化けのような魔術的な存在は、不明瞭で謎めいているがゆえに、常に未解決で真新しいという特徴を持つ（Subbotsky, 2010）。そのことが人々を魅了し、関心の持続のもととなっていると考えられる。第2に、お化けという想像上の恐怖を乗り越える経験は、やがては現実の恐怖を乗り越えていく経験に役立つ。経験を通して子どもの中に生じるであろう勇気や希望が、困難に立ち向かう契機となる。第3に、お化けに打ち勝つ、あるいはお化けと仲良くなるという共通の目標は、子どもの仲間集団における情動的交流を促し、仲間同士の連帯や協同へと向かわせる。そのことが集団としての育ちや学びを支え促すものと考えられる。

以上のように、お化けを取り入れた遊び・活動には

様々な実践上、及び発達上の意義を見出すことができる。にもかかわらず、幼児期において子どもはお化けをどのようにイメージし、どのように認識しているのかに関しては、サンタクロースをはじめいくつかの空想上の存在に対する実在性の認識を探る中で、比較としてお化けに関しても検討した研究 (e.g., Sharon & Woolley, 2004; 杉村・原野・吉本・北川, 1994; 富田, 2002) はいくつかあるものの、そのみを取り上げて具体的に検討した研究は見当たらない。幼児がお化けをどのように認識しているかを探ることは、この種の保育実践の意味や今後の発展可能性を探る上でも重要である。

そこで本研究では、幼児期におけるお化けについての概念的認識の発達について検討することを目的とする。具体的には、杉村ら (1994) と富田 (2002) を参考に、お化けに対するイメージ、お化けとの出会い経験と可能性判断、他者によるお化け経験談に対する本当／嘘判断などについて、幼稚園の年少児、年中児、年長児を対象に質問を行う。それにより、幼児期において子どもはお化けをどのように認識し、その認識はどのように発達的に変化するのかを明らかにする。

## 方 法

### 対象児

津市内 F 幼稚園に通う年少児 17 名 (男児 7 名, 女児 10 名, 平均年齢: 4 歳 2 か月, 年齢範囲: 3 歳 7 か月～4 歳 6 か月), 年中児 22 名 (男児 13 名, 女児 9 名, 平均年齢: 5 歳 0 か月, 年齢範囲: 4 歳 7 か月～5 歳 5 か月), 年長児 20 名 (男児 10 名, 女児 10 名, 平均年齢: 5 歳 11 か月, 年齢範囲: 5 歳 7 か月～6 歳 5 か月) を対象とした。

### 手続き

幼稚園にある静かな部屋で個別に面接調査を行った。調査者 (第 2 著者) は対象児と親和的關係を形成した後、以下の順に質問を行った。調査時間は 1 人につき 5～10 分であった。

まず、子どもが持つお化けのイメージを探るために、「お化けってどんなものだと思う？」(質問 1) と尋ね、自由に回答を求めた。子どもが 1 つ回答するごとに「他には？」と尋ね、子どもがすべてのお化けイメージを出し切るまで繰り返した。次に、お化けが出る時間や場所に関する認識を探るために、「お化けっていつどこにいるかな？」(質問 2) と尋ね、自由に回答を求めた。さらに、お化けとの出会い経験の有無について明らかにするために、「お化けにこれまで会ったことがある？」(質問 3) と尋ね、「会ったことがある」と回答した場合には、「いつ？どこで？どんなだった？」

(質問 4) と尋ね、経験したことの詳細を探った。「会ったことがない」と回答した場合には、「お化けに会えると思う？それとも会えないと思う？」(質問 5) と尋ね、経験の可能性についての判断を求めた。この質問において、「会えると思う」と回答した場合には、「どうやったら会えると思う？」(質問 6) と尋ね、また、「会えないと思う」と回答した場合には、「どうして会えないと思うの？」(質問 7) と尋ね、判断理由についての説明を求めた。最後に、他者によるお化け経験談を聞かされた時にどのように反応するかを探るために、「○○ちゃん (対象児) と同じ年齢の太郎くん (対象児が女兒の場合は花子ちゃん) が、お家で 1 人で遊んでいる時に、お化けに会ったことがあるって言ってたんだけど、それって本当だと思う？それとも嘘だと思う？」(質問 8) と尋ね、本当／嘘の判断を求めた。この質問において、「本当だと思う」と回答した場合には、「どうして本当だと思うの？」(質問 9) と尋ね、また、「本当じゃないと思う」と回答した場合には、「どうして本当じゃないと思うの？」(質問 10) と尋ね、判断理由についての説明を求めた。

なお、本研究では、一連の質問の作成に際して、子どもの心理面への影響を配慮し、「お化けっていると思う？」など、お化けの実在性の信念の可否を問うような直接的な表現の質問は一切行わず、間接的な表現の質問にとどめるように工夫した。

## 結果と考察

### お化けに対するイメージ

子どもはお化けに対してどのようなイメージを持っているであろうか。「お化けってどんなものだと思う？」(質問 1) と尋ねたところ、年少児で 35 件、年中児で 72 件、年長児で 94 件、合計 201 件の回答が得られた。201 件の回答は 97 種類の名称または特徴にまとめられた。Table 1 は、これらお化けのイメージに関する名称や特徴のうち、回答が多かった上位 10 位までをまとめたものである。最も多く見られたのは「白い」という特徴であり、全体の 25% の子どもが回答した。1 位から 2 位の間は 10 ポイント以上離れており、「幽霊」「ろくろ首」「ゾンビ」(各 14%) という名称が挙げられた。次いで「手をゆらゆらさせる」「怖い」(12%) という特徴が挙げられた。

97 種類の名称や特徴は、大きく「モンスター系」「ゴースト系」「その他」に分類することができた。具体的には、モンスター系には、ろくろ首、のっぺらぼう、からかさお化け、一つ目小僧、化け猫、鬼、山姥、河童などの日本の妖怪をはじめ、ゾンビ、魔女、ミイラ男、ドラキュラ、狼男、半魚人などの海外の怪物・怪獣、ジャ

Table 1 お化けのイメージに関する各回答数（上位10位）

順位	名称・特徴	年少児	年中児	年長児	合計
		N=17	N=22	N=20	N=59
1	白い	5	3	7	15
2	幽霊	0	4	4	8
2	ろくろ首	0	3	5	8
2	ゾンビ	0	6	2	8
5	手をゆらゆら	4	2	1	7
5	怖い	3	1	3	7
7	のっぺらぼう	0	1	5	6
7	からかさおばけ	0	2	4	6
9	ハロウィン	1	3	1	5
9	魔女	0	1	4	5
9	丸い	1	1	3	5

Table 2 お化けのイメージに関する1人当たりの回答数

	年少児	年中児	年長児
	N=17	N=22	N=20
0件	6	2	1
1件	3	7	3
2-3件	4	5	4
4-9件	4	8	10
10件以上	0	0	2
平均	2.0	3.3	4.7

ック・オー・ランタンなどハロウィン行事関連のもの、口裂け女のような都市伝説など、全部で34種類がこれに含まれた。ゴースト系には、幽霊、白いお化け、トイレのお化けなどの名称に加えて、白い、手をゆらゆらさせる、グニャグニャ・ユラユラ・ニョロニョロ・ニュルニュル、丸い、うらめしや、透明、浮いているという特徴など、全部で12種類がこれに含まれた。モンスター系には具体名が多く含まれたのに対して、ゴースト系では色や形、状態などを形容する表現が多く含まれたのが特徴である。また、その他には、怖い、怖がらせる、嫌い、嘔むなどの感情・感覚、寝てないと来る、夜、寝る時などの状況、お化け屋敷、幼稚園の後ろの山、暗い所などの場所、絵本、妖怪ウォッチ、ゼルダに出てくる、トムとジェリーに出てくるなど、お化けが登場するメディアや番組を述べた場合、UFO、宇宙人などの超常現象、ヘビ、ライオン、オオカミ、タヌキ、キツネなど動物の名前や野菜、ジャガイモ、豆など食べ物の名前を述べて暗にそれらがお化けと化したものを指し示す場合など、全部で51種類がこれに含まれた。

次に、お化けイメージに対する回答数の年齢による違いについて検討するために、1人当たりの回答数の分布と平均値を年齢別に算出し、比較した。Table 2はその結果を示したものである。回答数を得点化して、年齢を独立変数とした1要因の分散分析を行ったところ、有意差が確認された ( $F(2, 56)=3.49, p<.05$ )。HSD法による下位検定を行った結果、年長児は年少児よりも回

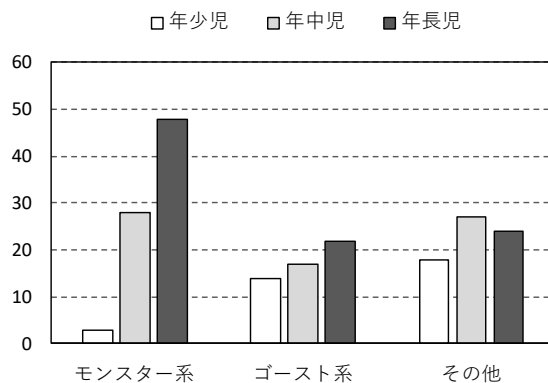


Figure 1 お化けイメージに関する各カテゴリーの回答数

Table 3 お化けのイメージに関する最初の回答

	年少児	年中児	年長児
	N=17	N=22	N=20
モンスター系	1	6	8
ゴースト系	9	11	9
その他	1	3	2
わからない/無回答	6	2	1

答数が多いことが示された ( $p<.05$ )。このことは、子どもは3歳から6歳にかけて、お化けに対するイメージがより具体的になることを示唆している。

さらに、お化けイメージの発達的変化について検討するために、「モンスター系」「ゴースト系」「その他」という3つのカテゴリーに含まれる回答数を年齢別に算出し、比較した。Figure 1はその結果を示したものである。Figure から、ゴースト系の回答は各年齢であまり違いはない一方で（年少児14件、年中児17件、年長児22件）、モンスター系の回答は年少児ではまだ少なく、年中児、年長児で増加することが分かった（年少児3件、年中児28件、年長児48件）。このことは、発達に従って、モンスター系のお化けに対する知識が豊富になることを表していると言えよう。

しかし、これらの結果を以て、子どものお化けイメージは発達に従ってゴースト系からモンスター系へと変化すると結論づけることに対しては慎重になる必要がある。なぜなら、そもそもモンスター系に含まれるキャラクターが多いため、複数回答を求めた場合に、知識がより豊富な年長の子どもほど、その名称を数多く述べるようになったに過ぎない可能性が考えられるからである。子どものお化けイメージの傾向を明らかにするためには、彼らが最初に思い浮かべたものは何だったかを明らかにし、比較することが必要であろう。Table 3は、複数回答のうちの最初の回答がどのカテゴリーであったかを年齢別にまとめたものである。この表から、最初にパッと思い浮かべるものとしてモンスター系が増えるわけではなく、むしろゴース

## 幼児はお化けをどのように認識しているのか？

ト系の方が年齢を通じて思い浮かべやすいことがわかる。ただし、年長児ではおよそ半々に分かれていることから、いずれかのイメージが加齢に伴って支配的になるということにはなさそうである。

また、お化けの出る時間や場所についての認識を探るために、「お化けっていつどんなところにいるかな？」（質問2）と尋ねた。その結果、お化けの出る時間に関しては、大部分の子どもが自分たちの寝ている「夜」に現れると回答した（48名、81%）。中には朝や昼など明るい時間にも現れると回答した者もいたが（5名、8%）、わずかであった。お化けの出る場所に関しては、最も多かった回答は「家の中の狭い場所・通路」であり（11名、19%）、次いで「暗い所」（8名、14%）、「お化け屋敷」（6名、10%）、「山・森」（4名、7%）の順であった。また、約3分の1が具体的な回答を提供することができなかった（17名、29%）。お化けの時間に関しては幼児期でもある程度共通の認識を有しているものの、お化けの場所に関してはさほど明確ではなく、認識も子どもによってまちまちであった。

### お化けとの出会い経験と可能性判断

子どもはお化けと会ったことがあるのだろうか。また、現実に出会うことのできるものとして認識しているのだろうか。「お化けに会ったことがある？」（質問3）と尋ねたところ、年少児8名（47%）、年中児5名（23%）、年長児3名（15%）が「会ったことがある」と回答した。Figure 2は、後述する経験の可能性判断の回答結果と合わせて、その結果を年齢別に示したものである。「経験あり」は、「会ったことがある」と回答した者であり、「経験なしー可能性あり」は、「会ったことがない」と

回答した後に、「会えると思う」と回答した者、「経験なしー可能性なし」は、「会ったことがない」と回答した後に、「会えないと思う」と回答した者である。出会い経験の有無の年齢による違いについて、3（年齢）×2（出会い経験の有無）の $\chi^2$ 検定を行った結果、有意傾向が確認された（ $\chi^2(2)=5.12, .05 < p < .10$ ）。残差分析を行ったところ、年少児は年中児や年長児と比べて、「会ったことがある」と回答した者が多いことが示された（ $p < .05$ ）。

お化けと会ったことがあると回答した子どもには、さらに、「いつ？どこで？どんなだった？」（質問4）とその詳細を尋ねた。Table 4は、お化けとの出会い経験のエピソードをまとめたものである。「いつ？」に関しては、ずいぶん前の1、2歳の頃のことを語った者もいれば、最近1年以内の出来事を語った者、さらにはインタビューの前日の出来事を語った者など様々であった。また、夜など1日のうちの時間帯について述べる者もいた。「どこで？」に関しても、自宅やベッド、山や道、外出先など様々であり、「どんなだった？」も自らが経験したとされるエピソードを様々に語ってくれた。

いずれにしても、こうしたお化けとの出会い経験は、「本物」のお化けとの出会い経験とは考えにくく、大きくは4つの可能性が考えられる。第1に、夢や想像、白日夢、ごっこ遊びなど想像上の経験を現実上の経験と混同した可能性、第2に、他者による口伝えや絵本やテレビなどのメディアを通じて見聞きしたことを現実上の経験と混同した可能性、第3に、実際にお化け屋敷などで経験した作り物のお化けを本物として認識した可能性、第4に、お化けとは無関係の何かをお化けとして見間違えたり勘違いしたりした可能性である。

Table 4 お化けとの出会い経験のエピソード

エピソード	年齢	性別
寝るときに起きていたら来た。丸いやつ。怖いやつ。一緒に戦いごっこで遊んだ。楽しかった。	年少	男児
ヒーローのどこ。仮面ライダーがいっぱいおとところ。動かないやつ。お化けどんなのか忘れた。	年少	男児
目で見たことは無い。布団ぞわぞわ。	年少	男児
ベッドの上。いっぱい捕まえた。	年少	女児
だいぶん前に自宅で。大きいお化け。棒でバンバンして捕まえた。	年少	女児
3歳と4歳の時。お祭りで。	年少	男児
夜にじいちゃんといいた時、お化け来た。白かった。	年少	男児
3歳の時に家で。うらめしやお化け。	年少	女児
1歳の時。あっちの山。お弁当持って歩いていたら前から。上からヘビ（が落ちてきた）。	年中	女児
暗いところ。	年中	男児
2歳の時。夜道でドライブしていたら、ぶつかって車が壊れた。そこにいた。	年中	女児
たんぼ組の時。裏山。女の子のお化け。	年中	女児
昨日。買い物に行った時。怖い。一人で。でも怖くなかった。	年中	男児
昨日。ママの家。自宅。変な奴。巨大なお化け。テレビで本物を見た。	年長	男児
4月に。滋賀県。青鬼。	年長	男児
すみれ組（年中児）の時。先生が連れてきた。裏から来た。オレンジ色の浴衣を着ていた。	年長	女児

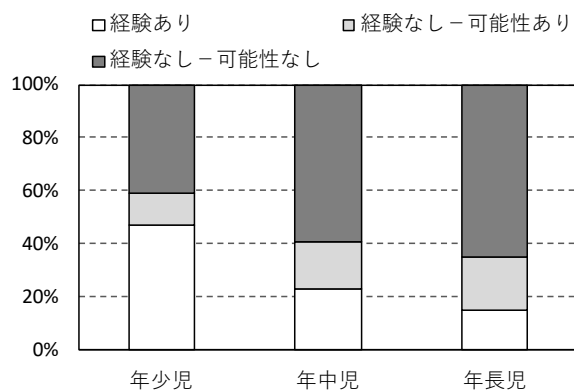


Figure 2 お化けとの出会い経験の有無と可能性判断

年齢的にも年少児に多かったことから、こうした情報の源泉に対する判断の誤りの可能性は十分に考えられる。しかし、たとえそれらが想像上のものや見かけ上のものであったとしても、彼らがあたかも現実であるかのようにそれと同等の強い感情を経験したことは確かなようである。

「会ったことがない」と回答した者には、さらに「お化けに会えると思う？それとも会えないと思う？」(質問5)と尋ねた。先述したように、Figure 2は、お化けとの出会い経験の回答結果と可能性判断の回答結果とを合わせたものである。その結果、年少児では9名中7名、年中児と年長児でもそれぞれ17名中13名が「会えないと思う」と回答するなど、出会い経験の実現可能性については否定的な子どもが多かった。

「会える」としたら「どうやったら会えるか？」(質問6)、「会えない」としたら「どうして会えないか？」

(質問7)について尋ねたところ、年少児では9名中6名、年中児では17名中13名、年長児では17名中14名から何らかの説明が得られた。これらの説明は「会える」「会えない」のどちらの説明もまとめて、どこに視点を定めて説明しているかによって、大きく「認識-状況」「認識-実在性」「知覚」「感情」「その他」に分けられた。Table 5は各カテゴリーの年齢別の回答数を示したものである。「認識-状況」には、対象が出現する可能性のある時間や場所などの状況を中心に説明し

Table 5 お化けとの出会いの可能性判断における説明

	年少児 N=9	年中児 N=17	年長児 N=17
認識-状況	5	6	7
認識-実在性	0	1	3
知覚	0	2	1
感情	1	4	2
その他	0	0	1
わからない/無回答	3	4	3

た場合が含まれた(例;「夜しか会えない。寝ているから」「9時に寝るから」「ハロウィンとか、おばけ屋敷(に行ったら会える)」「(お化けを)作ったら会える」「冒険したら。暗い所で会える)。「認識-実在性」には、実在性についての認識という観点から説明した場合が含まれた(例;「いない(と言っている)歌がある」「お化け屋敷にしかいない」「本当はおらんときもある」「もう死んでるってパパが言ってた)。「知覚」には、視覚による感知の可能性という観点から説明した場合が含まれた(例;「透明で見えないから」「見えにくいから)。「感情」には、対象から誘発される感情を中心に説明した場合が含まれた(例;「怖いから(会いたくない)」「会えたら目が回るから)。「その他」には、上記4つに含まれない説明の場合が含まれた(例;「勝手に出てくる)。

最も多く見られた説明は「認識-状況」に関するものであり、年少児では何らかの説明を述べる事ができた6名中5名がここに含まれた。年中児と年長児でも同様にこの説明が多く見られたが、それぞれ13名中6名、14名中7名とおおよそ半数に過ぎず、新たに「認識-実在性」や「知覚」に関する説明が見られたのが特徴である。伝え聞いたお化けが現れる状況だけでなく、それは実在するのかどうか、どのように見えるものなのかなど、お化けという対象が物語世界を超えて現実世界へと侵入してくる可能性について、より慎重かつ多面的に捉えることができるようになっていることがうかがえる。

#### お化け経験談に対する本当/嘘判断

他者から「お化けを見た」という経験談を聞かされることは、しばしばあり得ることと考えられるが、このような他者によるお化け経験談を子どもはどのように判断するであろうか。同年齢の子どもの経験談を話して聞かせ、その話について「本当だと思う？それとも嘘だと思う？」(質問8)と尋ねたところ、回答は「本当」と「嘘」、そして、「わからない」という回答や無回答を含む「あいまい」の3つに分かれた。Figure 3は、各回答の出現割合を年齢別に示したものである。お化け経験談に対する「嘘」判断の年齢による違いについて検討するために、「嘘」以外の回答である「本当」と「あいまい」とを同一のカテゴリーにして、3(年齢)×2(本当・あいまい, 嘘)の $\chi^2$ 検定を行った。その結果、有意傾向が確認された( $\chi^2(2)=5.23, .05 < p < .10$ )。残差分析を行った結果、年少児では他の年齢に比べて、「本当・あいまい」が有意に多く、「嘘」が有意に少ないことが分かった( $p < .05$ )。このことは、発達に従って、子どもは他者によるお化け経験談を単純に肯定的に聞き入れるのではなく、懐疑的に否定的に聞くことがで

幼児はお化けをどのように認識しているのか？

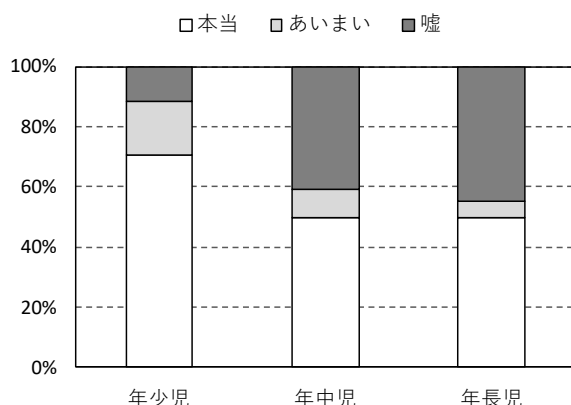


Figure 3 お化け経験談に対する本当／嘘判断

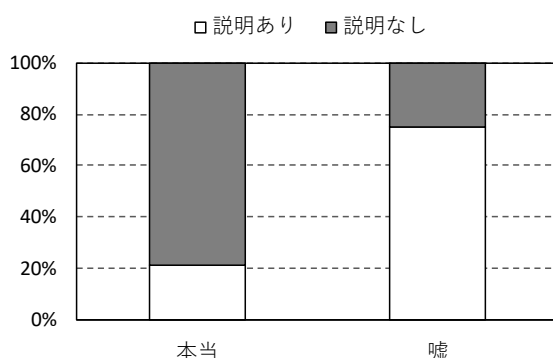


Figure 4 お化け経験談に対する本当／嘘判断と説明の有無との関連

きるようになることを示唆していると言えよう。

「本当」と回答した者には、「どうして本当だと思うのか？」(質問9)と尋ね、「嘘」と回答した者には、「どうして本当じゃないと思うのか？」(質問10)と尋ね、判断理由についての説明を求めた。何らかの説明を提供することができたか否かによって、子どもは「説明あり」と「説明なし」の2つに分けられた。Figure 4は、お化け経験談に対する本物／偽物判断の結果と説明の有無との関連を示したものである。「あいまい」に分類された者には説明を求めていないため、ここでは除外した。判断の違いによって説明の提供が左右されるのかどうかを調べるために、2(本当, 嘘)×2(説明提供の有無)の $\chi^2$ 検定を行った。その結果、有意差が確認された( $\chi^2(1)=12.71, p<.01$ )。残差分析の結果、「本当」回答者では「説明なし」(33名中26名)が有意に多く、「嘘」回答者では「説明あり」(20名中15名)が有意に多いことが示された( $p<.01$ )。なお、説明提供の年齢差に関して、「あいまい」を除いて、3(年齢)×2(説明提供の有無)の $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意差は確認されなかった( $\chi^2(2)=3.39, ns$ )。以上の結果は、他者によるお化け経験談が疑わしいことの理由を説明することは比較的容易であるが、それが信じられるに値す

Table 6 お化け経験談に対する本当／嘘判断における説明

		年少児 N=2	年中児 N=10	年長児 N=10
本当	身近な経験	0	2	2
	主人公の行い	0	1	1
	お化けの能力	1	0	0
嘘	状況の認識	0	1	4
	実在性の認識	0	0	1
	知覚・認識の錯誤	0	3	1
	主人公の意図	0	0	1
	回避したい感情	1	2	0
	力の誇示	0	1	0

ることの理由を説明することは困難であることを示唆していると言えよう。

子どもはどのような理由から、それは信じるに値するとか、それは疑わしいと判断したのであろうか。「本当」と主張する理由の説明は、Table 6の上段に示すように、「身近な経験」「主人公の行い」「お化けの能力」の3つに分けることができた。「身近な経験」とは、自分や身近な人たちにも似たような経験があるというように、他の似通った経験を根拠にその経験談の信憑性を主張するものである。この説明の仕方は4名で確認されたが、4名が4通りの仕方で行った。ある者は自己の経験を根拠とし(例;「自分もかめやで見た。1人だったら怖い」)、またある者は他者の経験を根拠とし(例;「友達が見たことある」)、別の者は心の中で経験したことを語り(例;「自分も頭の中で怖い思いをしたから」)、また別の者はメディアで見たことを経験として語った(例;「テレビで見た。トイレ流していなかったら出てくる」)。次に、「主人公の行い」とは、お話の主人公が夜遅くまで起きていてはならないという親の言いつけを守らなかったために、お化けが出たのだというように、主人公の悪い行いを原因として主張するものである(例;「寝ないから」「寝ている時間に遊んでたら出てくる」)。最後に、「お化けの能力」とは、お化けは目に見えないけれど、どこかから自分たちのことを見ている、ゆえに下手に信じていないかのようなふるまいをすると、後にどんな災いがあるかわからないから信じるべきだというように、お化けの底知れぬ超自然的な能力を警戒して主張するものである(例;「信じないと(お化けに)見られてるから」)。

「嘘」と主張する理由の説明は、Table 6の下段に示すように、「状況の認識」「実在性の認識」「知覚・認識の錯誤」「主人公の意図」「回避したい感情」「力の誇示」の6つに分けることができた。第1に、「状況の認識」とは、お化けとはある特定の時間や場所において現れるものだという認識のもと、主人公の出会ったものはお化けではないと主張するものである(例;「大人なら

(起きていても)いいけど、子どもだから(起きては  
はずがない)」「子どもは9時に寝るから(会えるはず  
がない)」「(家の中に)出てくるわけがない」「鍵を閉め  
ていたら入ってこない)。第2に、「実在性の認識」と  
は、お化けはそもそも実在しないという立場から、出  
会えるわけがないと主張するものである(例;「お化け  
なんていない)。第3に、「知覚・認識の錯誤」とは、  
見間違いや思い違いなど、知覚上または認識上の錯誤  
があった可能性を主張するものである(例;「見間違い」  
「毛布が引っ掛かった。見間違い」「夢)。第4に、「主  
人公の意図」とは、お話の主人公に相手を騙そうとす  
る意図があったと主張するものである(例;「騙そうと  
してる)。第5に、「回避したい感情」とは、その経験  
談の疑わしい点を主張するのではなく、単に本当だと  
信じることによって生じるネガティブな感情を避けた  
いがために、嘘であるという立場を主張するものであ  
る(例;「怖いから」「お化け、嫌」「目が回るから)。  
第6に、「力の誇示」とは、経験談の疑わしい点を主張  
するのではなく、単に自らの力を誇示して、お化けな  
んか怖くないと主張するものである(例;「私は何でも  
知っているから。やっつけられる)。

以上のように、他者によるお化けの経験談を真実と  
して信じるか疑うかに関して、その判断の理由を説明  
できた者は半数にも満たなかったが、それでも何らか  
の説明が行えた場合、特に年中児と年長児においては、  
実に多様な説明を提供してくれた。このことは、何ら  
かの不確かな情報を提示された時、年中児以上になると、  
それをただ鵜呑みにするのではなく、自らの経験  
や知識をもとに彼らなりに納得のいく判断を求めてい  
く姿勢がすでに育ってきていることを示唆している  
と言えよう。

### 総合考察

本研究では、幼児期におけるお化けに対する認識と  
その発達的变化について明らかにするために、幼稚園  
の年少児、年中児、年長児を対象に、お化けに対するイ  
メージ、お化けとの出会い経験と可能性判断、お化け  
経験談に対する本当/嘘判断など、一連の質問を行っ  
た。以下では、得られた結果をもとに、お化けに対する  
認識の各年齢における特徴、お化けを取り入れた遊び・  
活動の実践上の工夫や留意点、そして、今後の研究及  
び実践上の課題について考察する。

幼児はお化けをどのように認識しているのかという  
問いに対する答えは、これまで子どもの恐怖に関する  
研究と、子どもの存在論的区別、とりわけ空想と現実  
との区別に関する研究という2つの研究分野で示され  
てきた。そこでは冒頭で述べられたように、子どもは  
2、3歳頃からお化けのような想像的なものを怖がるよ

うになり、その後4歳から5歳へと少しずつお化けを  
人間や動物のような身近に経験できる存在とは異なる  
存在論的な意味を持つものであることを理解するよう  
になるが、その認識はまだ不安定であり、恐怖や不安  
など強い感情を喚起させると、正常な判断が困難にな  
ることが明らかにされている。しかし、これらの研究  
では、子どもはいつ頃からお化けを怖がるようになる  
のか、また、いつ頃からお化けを現実の人間や動物と  
は異なる存在として認識するようになるのか、そして、  
その認識は恐怖や不安といった感情とどのような関連  
が見られるのかについて明らかにしたに過ぎず、幼児  
期のお化けという存在をどのように思い描き、  
概念化しているのかについて答えを与えるものではな  
かった。本研究はその意味において、新たな知見を提  
供したと言える。

本研究では、いくつかの点において、年少児と年長  
児との間に有意差または有意傾向が確認された。第1  
に、お化けに対するイメージを尋ねた際に、年少児は  
年長児と比べて、その回答数が有意に少なかった。年  
少児の約3分の1は全く何らかの名称や特徴を述べる  
ことができず、回答数の平均も年長児の4.7件に対し  
て2.0件と大きく差があった(年中児は3.3件)。また、  
年少児ではお化けイメージとしてモンスター系のお化  
けを挙げるのが極めて少なく、ほんの3件のみであ  
った。これは年少児の全回答のうちの9%に過ぎず、年  
長児の51%、年中児の39%という占有率と比較しても  
少ない数字である。つまり、このことは、年少児はお化  
けのイメージを問われた時、多くの場合、「白い」や「手  
をゆらゆら」などゴースト系のお化けの抽象的な特徴  
を述べていたことを表している。以上から、年少児に  
おいては、お化けに関してまだ十分に明確なイメージ  
を持ち得ていないことが示唆される。

年少児の段階では、お化けをまだ漠然と捉えており、  
そこに年中児や年長児になるとモンスター系のお化け  
のイメージが加わって、より具体的で明確なイメージ  
を持つようになると考えられる。こうした結果は、サ  
ンタクローズとの出会い経験について尋ねた富田  
(2009)の研究においても似通った結果が示されてお  
り、納得のいくものである。富田の研究では、デパート  
や保育園、家の玄関、家の寝室、空の上、サンタの国  
など様々な場面でサンタを見たという他者の証言に対  
して、そのサンタが本物だと思うか偽物だと思うかを尋  
ねている。その結果、年中児ではいずれのサンタに対  
してもほぼ同様の水準で「本物」と回答したのに対し、  
年長児ではデパート、保育園、家の玄関で見たという  
サンタは「偽物」であり、家の寝室、空の上、サンタの  
国で見たというサンタこそが「本物」であるという回  
答が増えることを示している。夜間に人目のつかない



ように現れ、鍵のかかった家に入ったり空を飛んだりなど神秘的な能力を発揮するといった文化的に伝承される物語に対して、前者のサンタは一致しないのに対して、後者のサンタは一致する。このことから富田（2009）は、サンタクロース概念がより明確になるのは年長児段階である5、6歳頃からであると考察している。お化け概念についても同様のことが考えられよう。

第2に、お化けとの出会い経験について尋ねた時、年少児では47%が「会ったことがある」と回答した。これは、年長児では15%に過ぎなかったことと比較して、有意に多い傾向があった（年中児は23%）。出会い経験のエピソードは様々であったが、いずれも「本物」のお化けとの出会いを語っているとは考えにくく、ちょうどこの時期には、夢や想像と現実、見かけと本当などの未分化が部分的に確認されている（e.g., Flavell, Flavell, & Green, 1983; Flavell, Green, & Flavell, 1986; Woolley & Wellman, 1992, 1993）という事実と合わせて考えると、それらが原因である可能性も考えられる。彼らは経験した事実を客観的に分析的に捉えることがまだ困難であるため、主観的に感じられた怖さをそのまま本物のお化けと結び付けて考えてしまった可能性が考えられる。そうして経験される恐怖は、対象が想像や見かけ上のものであるとはいえ、年少児にとっては恐らく現実の恐怖と遜色のないものであろう。

お化けと「会ったことがない」と回答した者には、お化けと会える可能性について尋ねた。その結果、年齢と関係なく、大部分の幼児がその可能性を否定したが、その場合の理由の説明にもわずかではあるが年齢差が確認された。年少児による説明は、お化けが現れる可能性のある状況の説明か、自らが生じさせ得る感情の説明のいずれかであったが、年中児と年長児では、それらに加えて、お化けの実在性や視知覚の可能性といった説明も見られた。このように、年中児と年長児ではより多面的にお化けとの出会い経験の可能性について考えることができおり、この点は先述のお化け概念の明確化とも関連する結果であると言えよう。

第3に、他者によるお化け経験談を「本当」と判断するか「嘘」と判断するかを尋ねた際、年少児では「嘘」判断は12%に過ぎなかったが、年長児では45%にまで増加した（年中児は41%）。この差は有意傾向であった。このことは、他者によるお化け経験談という不確かな情報を聞かされた時、年少児ではかなりの者がそれを鵜呑みにしてしまう傾向にあるが、年中児や年長児になると懐疑的に捉えることのできる者もずいぶん増えてくることを示唆している。

同様の結果は、ありそうにない嘘を看破する能力について調べたLee, Cameron, Doucette, & Talwar（2002）の研究でも示されている。Leeらの研究では、母親が部

屋にいと隣の部屋からガラスの割れる音が聞こえ、急いで部屋に駆け付けると、割れたガラスのそばに娘が1人でいて、そばにある絵本を指さして、「絵本の中からゴーストが飛び出して、それがガラスを割ったの」と証言したという話を3～6歳児に聞かせた。そして、その娘の証言に対して「実際のところ、割ったのは誰だと思うか？」と尋ねている。研究の結果、3、4歳児では娘の証言を信じ、「ゴーストが割った」と回答する傾向が高かったのに対して、5、6歳児になると娘の証言を疑い、「本当は娘が割ったのだろう」と回答する傾向が高まったことを報告している。こうした先行研究の結果と合わせて考えると、年少児では「お化けを見た」という大人であればありそうにないと思えるような話を聞かされた場合でも、年少児はその話に対して疑問を抱くことなく信じてしまう可能性が高く、年中児や年長児になると、全てではないにしても、懐疑的な傾向が高まることうかがえる。

以上の議論をまとめて、ここからは本研究の結果から示唆される保育実践への貢献可能性について述べる。年少児ではお化けに対するイメージはまだ明確ではなく、漠然と得体のしれない怖いものとして捉えているようである。この段階では、夢や想像と現実、見かけと本当などの区別がまだ十分でないため、単に怖い何かを想像したり、見かけから怖さを感じたりしただけで、それがあたかも現実のことであるかのように感じられ、本気で怖がるということも多いようである。そのことは、お化けとの出会い経験の報告の多さからうかがえた。従って、年少児においてお化けを取り入れた保育実践を行う際には、彼らがお化けに対する恐怖感情を過度に生じさせないように十分に注意し、そのような場合に備えて恐怖を除去したり和らげたりする手立てを事前に講じておく必要がある（その具体的な手立て等については、富田, 2016を参照のこと）。

年中児から年長児になると、お化けに対するイメージはより明確なものとなり、その概念的知識も豊富になる。ゆえに、より幅広い視点から対象としてのお化けを捉えることができるようになる。そのことは、イメージに関する回答の多さや、可能性判断や本当／嘘判断における説明の豊富さからうかがえる。また、お化けの経験談のような不確かな情報に対しても、鵜呑みにするのではなく懐疑的に捉えることも少しずつ可能になってくる。このことは、お化けをテーマとした話し合いが豊かに成立する土壌ができてきていることを意味している。従って、年中児から年長児におけるお化けを取り入れた保育実践としては、探険・冒険や謎解きの楽しさを仲間とともに追求していくような取り組みがよりふさわしいであろう。彼らの探索・探究が充実したものとなるような、保育者による環境構成

の工夫や働きかけがより重要になると思われる。

最後に、今後の研究に向けての課題を述べる。本研究では倫理的配慮から、お化けの実在性に対する認識に関する直接的な質問は行わなかった。しかし、お化けとの出会い経験が年中児でも23%、年長児でも15%で報告され、他者によるお化け経験談を本当のこととして認める回答が年中児と年長児とともに50%も確認されたことから分かるように、お化けのイメージや概念が年少児と比べてかなり明確になった年中児や年長児においても、お化けの実在性を信じている者が多いことがうかがえた。他方、その経験の内容は、夢や想像との混同が疑われるものや、他者による証言や絵本やテレビなどのメディアを通して知り得た情報を自らの経験と混同したことが疑われるもの、お化け屋敷などでの作り物のお化けを本物と混同したことが疑われるもの、全く無関係の何かをお化けと見間違えたことが疑われるものなど様々であった。今後はこうした経験談を数多く蓄積し、質的な分析を積み重ねる中で、子どもがどのような経験を通してお化けのリアリティを形成していくのかをより詳細に検討していくことも、研究の在り方として考えられよう。

## 文 献

- Carrick, N., & Quas, J. A. (2006). Effects of discrete emotions on young children's ability to discern fantasy and reality. *Developmental Psychology*, **42**, 1278–1288.
- Carrick, N., & Ramirez, M. (2012). Preschoolers' fantasy-reality distinctions of emotional events. *Journal of Experimental Child Psychology*, **112**, 467–483.
- DiLalla, L. F., & Watson, M. W. (1988). Differentiation of fantasy and reality: Preschooler's reactions to interruptions in their play. *Developmental Psychology*, **24**, 286–291.
- Flavell, J. H., Flavell, E. R., & Green, F. L. (1983). Development of the appearance-reality distinction. *Cognitive Psychology*, **15**, 95–120.
- Flavell, J. H., Green, F. L., & Flavell, E. R. (1986). Development of knowledge about the appearance-reality distinction. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **51**, Serial No.212.
- Harris, P. L., Brown, E., Marriott, C., Whittall, S., & Harmer, S. (1991). Monsters, ghosts, and witches: Testing the limits of the fantasy-reality distinction in young children. *British Journal of Developmental Psychology*, **9**, 105–123.
- Hurlock, E. B. (1972). *児童の発達心理学(上・下)*(小林芳郎・相田貞夫・加賀秀夫, 訳). 東京: 誠信書房.
- (Hurlock, E. B. (1964). *Child development*. New York: McGraw Hill Book.)
- 今井和子. (1990). *自我の育ちと探索活動: 3歳までのあそびと保育*. ひとなる書房.
- Jersild, A. T. (1974). *ジャーシルドの児童心理学* (大場幸夫・斎藤謙・沢文治・服部広子・深津時治, 訳). 東京: 家政教育社. (Jersild, A. T. (1968). *Child Development (5th ed.)*. New Jersey: Prentice-Hall.)
- Lee, K., Cameron, C. A., Doucette, J., & Talwar, V. (2002). Phantoms and fabrications: Young children's detection of implausible lies. *Child Development*, **73**, 1688–1702.
- Newson, J., & Newson, E. (1968). *Four-years-old in an Urban Community*. London: George Allen and Unwin.
- Samuels, A., & Taylor, M. (1994). Children's ability to distinguish fantasy events from real-life events. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 417–427.
- 佐々木宏子. (1989). *絵本と想像性: 3歳まえの子どもにとって絵本とは何か*. 高文堂出版社.
- Sharon, T., & Woolley, J. D. (2004). Do monsters dream? Young children's understanding of the fantasy/reality distinction. *British Journal of Developmental Psychology*, **22**, 293–310.
- Subbotsky, E. (2010). *Magic and the mind: Mechanisms, Functions, and development of the magical thinking and behavior*. New York: Oxford University Press.
- 杉村智子・原野明子・吉本史・北川宇子. (1994). 日常的な想像物に対する幼児の認識: サンタクロースは本当にいるのか? *発達心理学研究*, **5**, 145–153.
- 田代康子. (2001). *もっかい読んで!: 絵本をおもしろがる子どもの心理*. ひとなる書房.
- Taylor, B., & Howell, R. J. (1973). The ability of three-, four- and five-year-old children to distinguish fantasy from reality. *Journal of Genetic Psychology*, **122**, 315–318.
- 富田昌平. (2002). 実在か非実在か: 空想の存在に対する幼児・児童の認識. *発達心理学研究*, **13**, 122–135.
- 富田昌平. (2009). 幼児におけるサンタクロースのリアリティに対する認識. *発達心理学研究*, **20**, 177–188.
- 富田昌平. (2012). *子どもとつくる2歳児保育: 思いがふくらみ響きあう* (加藤繁美・神田英雄監修). ひとなる書房.
- 富田昌平. (2016). 2歳児クラスにおける想像上の怖いものを楽しむ遊び: その展開過程と保育者の働きかけ. *心理科学*, **37**, 21–30.
- 富田昌平. (2017a). 幼児期における恐怖対象の発達の变化. *三重大学教育学部研究紀要 (教育科学)*, **68**, 129–136.
- 富田昌平. (2017b). *幼児期における空想世界に対する認識の発達*. 風間書房.
- 富田昌平・原充代. (2006). 幼児における空想/現実の区別の認識. *幼年教育研究年報*, **28**, 51–59.
- Woolley, J. D., & Wellman, H. M. (1992). Children's conce-

ptions of dreams. *Cognitive Development*, 7, 365-380.

Woolley, J. D. & Wellman, H. M. (1993). Origin and truth: Young children's understanding of imaginary mental representations. *Child Development*, 64, 1-17.

### 付 記

本論文は、第二著者による三重大学教育学部 2015 年度卒業論文で得られたデータを再分析し、新たに論を展開したものです。調査にご協力いただいた幼稚園の先生方及び幼児の皆さんに深く感謝申し上げます。